

世界のNINAGAWA

(財)埼玉県芸術文化振興財団の新芸術監督へのメッセージ



『朝からピフテキ食ってますか?』

演出家
Director **野田秀樹** Hideki Noda

私は16歳で蜷川演出の芝居を見たことが自慢だ。
新宿のアートシアターという、もはや潰れてしまった小劇場で、当時それはアングラ芝居と呼ばれていた。私が若いころ、もっとも感激した二つの芝居のうちの一つになった。(もうひとつは、ピーター・ブルック演出の『真夏の夜の夢』である。) 私はその時、蜷川幸雄という名前を脳の壁にしっかりと刻み込んだ。だからそのころの、蜷川さんの発言をよく覚えている。今のように、たくさんの演劇雑誌や情報が氾濫していたわけではない。それでも、その言葉をキャッチした。
「俺は、朝からピフテキを食う」
中でも、この言葉が十代のわたしには鮮烈だった。貧乏くさいアングラ芝居が全盛の時代にそのアングラ出身の演出家の心意気がうれしかった。なんだか、芝居を始めたばかりの若い連中すべてに向けられた挑発のように聞こえた。これから、長い長い芝居の旅が始まる。それには、膨大なエネルギーが必要だぞ。朝からサラダなんか食ってる場合じゃねえぞ! そんなことだったんじゃないだろうか。
以来、私は、エネルギーのない芝居だけはやったことがない。その意味で私は蜷川さんに直接教えを受けたことはないが、勝手にその精神を受け継いでいるつもりだ。
このたびは(財)埼玉県芸術文化振興財団の新芸術監督になると聞き、また蜷川さんが新しいことをやり続けるつもりだと知り「蜷川さん、朝からピフテキを食ってるね」と一人ほくそえんでいる。もっとも、もう誰もがピフテキなんてコトバ、使わなくなったけれども。

出し惜しみしない男

評論家
Critic **三浦雅士** Masashi Miura

蜷川幸雄の舞台の印象を一言でいえば出し惜しみしないということに尽きる。舞台上こんな贅沢なことをしているのかと思った最初が蜷川幸雄の芝居『真情あふるる軽薄さ』で、二度目がフランコ・ゼフィレリのおペラ『ラ・ボエーム』だった。最初の体験は40年近い昔の話で、幕切れで機動隊(じつは役者たち)に取り囲まれたときには驚いた。一人を際立たせるには集団が、集団を際立たせるには一人が必要なのだろうか、まったく贅沢な話だ。質素を際立たせるには贅沢が、贅沢を際立たせるには質素が必要なかもしれないが、不思議なのはしかし、蜷川幸雄の手にかかると、贅沢はあたりまえのように贅沢に見え、他方、質素もまた贅沢に見えてくるのである。

これはとても重要なことだ。というのは、舞踊も演劇も音楽も、もともとは身体芸おおばんふるまの腕飯振舞い、ポトラッチ、お祭りのようなもの、いやお祭りそのものだったからである。それが近代になってどこかしねりむつりした深刻なものになって、とうとう不条理劇にまでなってしまったわけだが、出し惜しみしない男・蜷川幸雄は、その正反対だった。反時代的といってもいい。反時代的だったこの男を時代のほうが追いかけてきて、結局は世界の蜷川になってしまったわけだが、我田引水を承知でいえば、それは要するに演劇の舞踊化という大きな流れのなかで蜷川幸雄の才能が開いたということなのだ。いまや美術でさえも舞踊化、といって悪ければ舞台芸術化している。世界中の美術館が劇場になろうと躍起になっている。美術もまた舞踊や演劇のように体験されるべきものに、つまり原初の姿に戻ってきているのだ。

バレエは身体芸の腕飯振舞い。もしも蜷川幸雄が『白鳥の湖』や『胡桃割り人形』や『眠れる森の美女』を演出したらどうなるだろうか。ありえないなど言うてはいけない。出し惜しみしない男・蜷川幸雄である。何が起こるか分かりはしない。世界は固唾を呑んで見守っている。



作曲家
Composer **マイケル・ナイマン** Michael Naiman

(財)埼玉県芸術文化振興財団が蜷川さんを新芸術監督に任命したことは、心から感動的なことであり賢明なことでもあると思います。日本にとって、そして私にとってはさらに重要なことですが、世界的に蜷川作品は伝説的であり、力強く、幻視的で、想像力に富み、勇敢です。この前彼にお会いしたとき、芸術家としての自分(すでに上級!)を絶えず自己改革しているという事実に驚かされました。過去の成功を単に繰り返すだけでも認められるというのに、彼がこういった芸術的演出家精神を自分の創造的プロジェクトすべてに付け加えようとしているとは思いませんでした。

I find it both deeply moving and enlightened of Saitama Arts Foundation to appoint Ninagawa-san as their new artistic director. Within Japan and, more importantly to me, internationally, Ninagawa's work is legendary - powerful, visionary, imaginative, and always courageous. When I last met him and marvelled at the fact that for an artist of his (advanced!) he is constantly re-inventing himself, when it would be acceptable merely to repeat his past successes, little did I know that he would add this artistic directorship to his list of creative projects.
Michael

プロデューサー
Producer **セルマ・ホルト** 上級勲爵士 Thelma Holt, CBE

蜷川さんが2006年より(財)埼玉県芸術文化振興財団の芸術監督に任命されたことは、私に二重の喜びをもたらしてくれました。ご就任されたこと自体の喜びだけでなく、私が再び埼玉を訪れる理由ができたのです。これは私個人にとって大変嬉しいことです。

彩の国さいたま芸術劇場は英国の演劇関係者の心の中で非常に温かい場所として存在しています。とりわけここが、蜷川さんのあの忘れがたい作品、サー・ナイジェル・ホーソーンが主役を演じた「リア王」を上演した素晴らしい劇場であり、しかもこの作品がその後ロンドンでもシェイクスピアの故郷ストラットフォード・アポン・エイヴォンのロイヤル・シェイクスピア劇場でも上演するという栄誉を授かったのです。

国際的なステータスが他を抜き出ている演出家の数は限られています。そのような演出家のお世話をさせていただくのは大変名誉なことです。私は20年間蜷川さんのお手伝いをさせていただいた経験からこう言えるのです。蜷川さんの業績が世界の演劇界で認められ、英国政府から上級勲爵士を叙勲されたとき、私たちはこの上なく誇りに思いました。英国人でない演出家がこういった栄誉を授かることは非常に珍しく、これで私は10年多く寿命をいただいたように思います。

2006年、私たちはホリプロと(財)埼玉県芸術文化振興財団の協力により、RSCのコンプリート・ワークス・フェスティバルの一環として蜷川さんの「タイタス・アンドロニカス」をストラットフォードにお迎えすることになっています。2007年にはオックスフォード大学マグダレン・カレッジにいらしていただき、私たちが古代ギリシア劇を理解する手助けをさせていただきます。キャメロン・マッキントッシュの後援の下、オックスフォード大学演劇協会への協力を通して、大学生たちへの彼の激励は、この芸術形式の将来における彼の絶えることのない信念を実証してくれます。

蜷川さんと埼玉の結びつきは完璧です。2006年後半の、彼らの努力の成果に大いに期待します。私は日本へ行くことをいつも楽しみにしています。このような素晴らしい劇場で蜷川さんの作品をまた観ることができるのは、私にとってまたないご褒美になるでしょう。



The announcement that Ninagawa had been appointed Artistic Director of Saitama Arts Foundation from the beginning of 2006 gave me cause for double celebration. Apart from the pleasure such an appointment provides, it also means I have an excuse to travel to Saitama again. That gives me great personal joy.

Saitama Arts Theatre a very warm place in the hearts of theatre people in the UK, not least because of our experience in your wonderful theatre with Ninagawa's unforgettable English-speaking production of KING LEAR with Sir Nigel Hawthorne in the title role, a production which we subsequently had the honour to present in London and in Shakespeare's home at the Royal Shakespeare Theatre, Stratford-upon-Avon.

There are a small number of theatre directors whose international status sets them apart from the rest of the profession, and those of us who serve them are very privileged to do so. I can say that after the honour of serving Ninagawa for 20 years. We were enormously proud when Ninagawa's work in world theatre was recognised by his being presented with the Hon.CBE by the British government. Very few non-British directors have been honoured in this way, and I know it gave me 10 extra years of life.

In 2006 we will be welcoming Ninagawa to Stratford where in association with Horipro Inc. and Saitama Arts Foundation. We shall be presenting his production of TITUS ANDRONICUS as part of the RSC's Complete Works Season.

In 2007 he will visit Magdalen College Oxford to help us understand ancient Greek drama a little better than we do. His encouragement of our university students through his support of Oxford University Dramatic Society, under the auspices of Cameron Mackintosh, demonstrates his continued belief in the future of our artform.

Ninagawa and Saitama are a perfect marriage, and I look forward to the fruits of their labours later in 2006. For me travelling to Japan is always a journey I look forward to, and it will be an added bonus that I will once again be seeing Ninagawa's work in such a splendid theatre.

THELMA HOLT, CBE